

第8回札幌市まちづくり戦略ビジョン審議会 議事録

日時 平成25年5月29日(水) 13:30~15:00
会場 札幌すみれホテル 3階「ヴィオレ」

1 出席者

- (1) 審議会委員（内田会長、小林副会長、五十嵐委員、梶井委員、金子委員、志済委員、杉岡委員、田村委員、為定委員、服部委員、早川委員、星野委員、丸山委員）
- (2) 専門委員（木下専門委員）
- (3) 事務局（渡邊市長政策室長、石川政策企画部長、稲木企画課長、浅村計画担当課長）

2 開会・挨拶

【浅村計画担当課長】

- ・開会案内

【内田会長】

早速議題に入ります。議題「まちづくり戦略ビジョン<戦略編>答申書(案)について」と、「審議会等における意見の反映状況について」について、一括で事務局から説明をお願いします。

2 議事

- (1) まちづくり戦略ビジョン<戦略編>答申書(案)について
- (2) 審議会等における意見の反映状況について

【浅村計画担当課長】

- ・資料説明(資料1~5)

【内田会長】

今日で最終回ということですので、今、事務局から説明のありました答申案について最終的な形として取りまとめたのですが、審議会で前回ご発言のあった内容については今説明がありましたように概ね反映されていると私は受け取りました。

それから、今日は札幌市議会総務委員会の議論を踏まえて事務局側から、市民・企業が夢を持って共に取り組んでいけるような具体的なイメージとしてのクローズアップの案が本日提案されました。本日は最後の審議会ですので答申案をまとめる必要がありますので、それぞれについてご意見があるとは思いますが、具体的に「この部分をこうすべきだ」という形でのご意見を頂ければありがたいと思っております。価値判断が入る場合はそれをどう直したらいいのかというご提案を付けた形でご発言いただければありがたいと思っております。

これから、答申案とクローズアップを分けて審議していきたいと思っておりますので、よろしくお願ひしたいと思います。まず、答申書の案についてですけれども、クローズアップを除いたところでは

ども、そのこのところについて何かご意見があれば承りたいと思います。

【木下専門委員】

文言の確認をしたいところがありまして、11 ページの一番上に「地域医療ネットワークの強化」という見出しがあるのですが、説明を見ますと介護が大きな柱として入っていますので、「地域医療介護ネットワークの強化」というようにできないかなと思いました。もし、医療ネットワークとしてしまうと、介護事業者があまりうちとは関係ないなと思ってしまいかねないなと思いますので、追加できないかなと思った次第です。

もう一つは 18 ページの下に、ニートの説明があるのですが、「仕事についておらず、就職活動もしていない若者のうち、家事も通学もしていない人」とありますが、「家事」というのは入るのでしょうか。「家事」は入らないような気がしていたのですが、ニートの定義としては、仕事に就いているか、職業訓練に行っているか、教育を受けているかということだったと思うので、「家事」は無くてもいいのではないかなと思ったのですが、これはまた後でご確認できたらと思いました。

それと 21 ページの一番下の文章なのですが、もしかしたら間違いかなと思って確認させていただきたいと思ったのですが、「地域の需要に応じた路線バスルートの見直しや、生活交通の確保に向けた取組を進めます」とあるのですが、内容としては「地域の需要に応じた路線バスルートの見直しなどによる生活交通の確保に向けた取組を進めます」ということかなと思ったのですが、これも御確認できたらと思いました。

【内田会長】

今日中に決めますので、最初の部分のご発言のとおり直していただく方がよろしいと思います。ニートの部分はあとで調べていただいて、3 番目のところは文章の書き直しで終わると思いますが、いかがでしょうか。

【浅村計画担当課長】

一番目の地域医療ネットワークの部分は、もちろん地域包括センターや介護分野の機関も含めたネットワークを強化していくということで、医療と介護の切れ目のない連携をめざしていますので、そこは今後追加したいと思います。

ニートについては今確認をいたします。

それから 21 ページですが、ここはバスルートの見直しということで、今の路線バスを何らかの形で残すというようなものと、もう一つは地域が主体となってもう少し小振りのコミュニティベースで、バスを路線ということではなく、足を確保していくということを少し分けて段階的に柔軟な対応をしていくというイメージを出したかったのですが、こういうような表現をしまして、そこは路線バスの最適な運行化ということの基本としつつも、これからそうではなくなるような地域も出てくる、採算制等の問題で。その時にどういう風に地域の足を確保するのかということは、路線バスだけではなくてもう少し柔軟な対応をしていけるようなことも今後想定するというので、ここは分けて記載しておりますので、その部分ご了解いただければと思います。

【杉岡委員】

2か所ほど定義の根拠について確認しておきたいと思います。15ページの「若者」の定義の説明は、総務省や国の定義になっているのかどうかということを確認させていただきたいと思います。本文のところに「社会全体で育てていく意識」とあるので、35歳まで育てなければならないということ、実際には30歳くらいまでではないかと私は思っているのですが、国の考えでは学業を終了するのが30歳くらいまでかかることも多いので、社会的に自立する年齢が遅くなっているというのが一般的に言われているのですけれど、34歳までを「若者」ということになると、その後、「青年」とか「壮年」とか、「若者」の後は何者なのか分からないのですけれど、どこの定義を前提として使っているのかを確認させていただきたい。

それから23ページ、議論をする中であまり細かいことは言っていなかったのですけれど、「地域コミュニティ」という言葉がよく使われていて、まあいいんじゃないかとか言っていなかったんですけど、この定義をどこのものを使ってこのように説明することにしたのかということです。

地域コミュニティ、ローカルコミュニティという言葉もあれば、ネイバーフッドコミュニティという言葉もあるし、単にコミュニティというだけでは分かりづらいので、地縁的な要素を付けるために「地域コミュニティ」という名前を使ったのだと思うのですが、こういう風に定義づけをされている物が他に合って、それを転用しているというのであれば、教えていただければと思います。

【浅村計画担当課長】

「若者」に関しては、札幌市におきまして若者支援基本構想を策定いたしまして、その中で34歳までという定義をしたはずですが、国の動向を踏まえた形になっているかなと思いますので、その辺りは確認させてください。我々の認識といたしましては、いわゆる支援が必要なニート・ひきこもりという人達が、高齢化していると認識のもとに若者支援基本構想を策定しているという経過がありまして、やはり支援をする年齢対象が少し広がってきている中での定義です。国の法を準拠しているかどうかについては、ちょっと確認させていただきたいと思います。

【杉岡委員】

もし、札幌市だけのオリジナルであれば、カッコして「〇〇計画」としてもらいたいと思います。これはウェブ上でも公開されるわけですよね。「若者とは18歳から34歳までのことを言う」とクイズ番組でも使われる可能性がありますので、ちょっと心配しています。

【浅村計画担当課長】

それでは定義の根拠や出典を明記するということで整理させていただければと思います。それから「地域コミュニティ」ということですが、コミュニティの定義自体は広いということの中で、やはりこの創造戦略の中では「地縁的なコミュニティ」や「歩いて暮らせる」など、測地的なコミュニティというものを最も重要な市民のユニットと考えましたので、その部分で「地域コミュニティ」という言葉の使い方をしているところです。

【杉岡委員】

札幌市で定義したということですか。地域コミュニティに注釈を付けたということになると、公的

に説明をするということになってくるので、他に政府関係のものや研究者の辞典にも使っている物もあれば使っていない物もあるのであまり一般化はしていませんけれど、日常的に使うようになってきているのは間違いないのですけれど、市としてこういう風に定義づけしているのはここから参考にしているというのか、札幌市としてこのように定義づけしたということなのかということをご区分しておかないと。

【浅村計画担当課長】

ビジョン編においても「地域コミュニティ」については同じ定義をしております、実はこれは札幌市第4次長期総合計画の時から「地域コミュニティ」というのはこういう書き方で定義をさせていただいております。確かに「地域」という概念自体がかなり幅広いということがありまして、地域そのものは何なんだということ、これは捉え方によっては市区町村のレベルもありますし、都道府県のレベルでも地域というものが語られる場面もあります。ただ、この中で地域をどう定義するのかということについては、これも「ビジョン編」の中で、「行政区より小さい、生活に身近な空間的な広がり指します」と定義をしております。できれば我々も「地域」というものが、例えば小学校区単位だとか、そういった形で定義づけできればいいんでしょうけれども、場合によってはもう少し広い範囲でとらえるべき「地域」というものもありますので、そこは場合によって「地域」という範囲を定めていくという必要がありますので、こういう言い方で定義しているところです。

【石川政策企画部長】

補足ですけれども、第4次長期総合計画におきましても、今説明したとおり、「地域コミュニティ」というのがあります。札幌市の、要するに設立というか、今の地域を守る状況でよく議論に出ています。連合町内会単位という概念があつて、そこにまちづくりセンターがあるということで、今はまず第4次長期総合計画の地域コミュニティについては、「こういうものとする」という例示表現をしております。したがいまして、今説明がありましたけれども、この戦略編につきましても、その考え方は札幌の考え方ということで、最後の凡例の所、「とする」というふうに修正をさせていただきたいというふうに思います。

【金子委員】

6ページが一番下の「共助」という注のつけかたで、「隣近所や地域を始めとする様々なコミュニティが助け合うこと。」というのは良くない。なぜかという、助け合うところできてコミュニティができるわけですから、コミュニティが助け合うということは無いです。ですから、隣近所や地域を始めとする様々なコミュニティでというか、様々なところで協力関係が成立する、そういうふうにししないと、「共助」の意味が出てきません。ここでコミュニティを使う必然性は無いと思います。消した方がいいです。

【浅村計画担当課長】

それではこの「共助」の定義については、コミュニティという言葉を使わずに隣近所や地域で協力関係が成立すること、というふうに修正させていただきます。

【小林副会長】

前回お話しできれば良かったんですが、検討したいことがあります。実は、今、いくつかの都市のこういう計画策定に関わっているのですが、その一つにブラジルのクリチバという都市があります。札幌と同じくらい、人口180何万、広域350万くらい。そこで、12月に市長選挙があって、新しいビジョンをつくらうということがあって、4月5月でずいぶん議論してきたんです。その中で、自分のビジョンを分かりやすく市民に伝えて、クリチバというのは、1970年くらいに「人間環境都市」ということで世界からもすごく評価されて、リオ+20でも、環境配慮に関する賞をもらったところです。そこで、新しい都市のアイデンティティが分かる、分かりやすいメッセージみたいなものをつくりたいと言っていて、まだ決まっていないのですが、例えば、イノベーションシティとか、サステイナブルシティとか今の市長は言っているのですが、サステイナブルシティというのは既にたくさんあるんです。何を言いたいかというと、札幌も、市民にとって分かりやすい言葉と内容を示し、世界にチャレンジしているんだと言うことが分かる副題というか、そういうものを考えた方が良いのではと思っていました。結論としては、2000年に「新しい公共」という考え方が提案されました。それ以降、新しい公共というのがいろんなところで使われるようになって、前政権時にも言われていました。ほとんどのまちでそれが使われていますが、札幌市も市民計画という前提でこれをやっている、ですから、新しい公共、つまり行政と専門的な職能を持っている人が案を決めると言うことではなくて、市民ときちんと意見交換しながら、クリエイティブなものになるものにしていこう、しかも、次のステップに向けて、チャレンジしていきたいという意図だと思います。それで、さきほどのイノベーションとか横文字を使うところが多いんです。札幌のビジョンというのは子どもからお年寄りまで、分かりやすいものにするために、横文字じゃない方が良いのではないかと思います。それで、例えば、あまりそういう言葉は使わないんですけれども、共に創ると書いて「共創」というのを表に出す札幌である「共創都市札幌」はどうか。ただし、それだけでは分からないので、それに加えて「SLIM City」という使い方をしてはどうか。スリムというの、スマートシティと同じような使い方としていますが、スマートシティとは、オバマさんが、安定した電力系統を作ろうと、スマートグリッドというのを提案して、それが少し展開して、IT技術が加えてスマートシティと読んでいます。ところが、スマートシティとはどちらかというとエネルギーや電力の最適化と言うことで、やや狭義な言葉じゃないかといわれていて、それをもう少し経済とか社会とか、環境だとかも加えて「スリム」という言葉を使おうと、少し広義な意味で使おうと言っているんですね。私がスリムシティというのは、英語の単語としてのスリムということだけではなくて、「S・L・I・M」なんです。SはSustainability（サステイナビリティ）、今までのサステイナビリティ、今、コミュニティの話も出ましたが、それも含めてサステイナビリティというのはずいぶん加わっていると思うんです。そしてLというのは、全ての世代、職の人達が年代を超えて、安定して、つまり生活をきちんと保証しながら、質の高い、あるいはセフティーネットも加えながら住んでいけるLivable（リバブル）、それからIはInnovation（イノベーション）。この戦略の中でも随分「創造」という言葉が出てきますが、何かイノベーションしたいという気持ちが秘められている。それからMはManaging（マネージング）だと思うんです。つまり、4次長総と今回の違いは何かというと、エネルギーのマネジメントとモビリティのマネジメントをきちんとやっていこうと言うところは大きな違いだと思います。そういう意味で、市民と一緒にいながら、地域社会、あるいはより上位なエネルギーとかも加えてマネジメントしていこう、行財政も含むんですけれども、そういうものなんじゃないかな。それで、SustainabilityのSと、

Livable のL、Innovation のI と Managing のM、それを加えて SLIM、全体として、横浜がやっているようなスマートではない、もう少し包括的な都市を目指そうとしているんだということが読みとれるような、スリムシティ札幌、そういうようなことで、今まで庁内でやられたこと、あるいは審議会でやってきた色々な議論、そういったことを象徴化するような言葉に置き換えて、札幌は少し違うことをやり始めたと言うことを市民、それから国内にアピールすることが必要なんじゃないかなと、考えていたところです。そういったことを加えてはいかがかなと、ご検討いただければと思います。

【内田会長】

ビジョン編のメッセージはどういうものでしたか？

【石川政策企画部長】

ビジョン編の第3章の目指すべき都市像、ここを読み上げますが、「北海道の未来を創造し、世界が憧れるまち」が一つ、もう一つは「互いに手を携え、心豊かにつながる共生のまち」です。戦略ビジョンにおける都市像は、この2つで議決を得ている状況です。

小林先生からのご提言のスリムシティの概念につきましては、戦略編の84ページの「都市空間の創造に当たっての基本目標」のキャッチフレーズ「持続可能な札幌型の集約連携都市への再構を進める」のところの内容に合致していますので、例えば、この基本目標のサブタイトルとして記載しながら、その意図を表記するという方法があるのかなと考えます。

【内田会長】

いいと思います。前に都市像のところ、みなさんで考えて案を出したという経過がありましたが、今の時代にマッチするというものはなかなかありませんでしたが、そういう意味で、包括された言葉があったということで、小林先生から提案があったと思います。これを全部表にみせることは難しいので、都市空間のところ、書いていただければいいと思います。

【杉岡委員】

提案としては、P4の「戦略編の展開にあたって」の説明で、ここは行政計画として立てているために、行政の立場で書かれていますが、すべての事項は、市民のあらゆる協力が必要で、連携を引き出していかなければいけないので、市民のポテンシャルを極大化していく基本的なスタンスが行政に問われているので、それがわかりやすく書いてあったほうが、市民に対する呼びかけとしては良いと考えます。各項目にはそういった記載はありますが、もう少し市民の力をうまく引出しながら、マネジメントをしていったほうが良いという提案です。

【石川政策企画部長】

ご提言ありがとうございます。ビジョン編の最後の5章のところにも、まさにこれらのビジョンを進める基本姿勢として、第1番目に「市民が主役のまちづくり」という概念を打ち出して、一人一人の参画というテーマがありましたので、その部分をこの4ページの戦略編の展開に当たってというところに記載する方向で行きたいと思います。

【内田委員長】

今回分けてあるので、理念的な部分というのは結構ビジョン編に入っているので、戦略編だけ読むとやっぱり抜けちゃっているんで、どうしても対でないという面があると思います。今回は分けるというやり方をしたので、そういうところにこちら側としても理解不足のところがあったのかもしれませんが。基本的な理念としては、これはちゃんとビジョン編に載っていますので。

【木下専門委員】

ボランティアについての箇所です。17ページですが、こちらのほうでボランティアポイント制度というのが入ってはいるのですが、札幌市でもボランティアセンターが設置されていますので、ボランティアセンターをもっと積極的に活用するなどの文言がどこかに入らないかなと。まちづくり活動への参加促進のところとか、もしくは、またもうひとつ白マルに入れても良いと思ったのですが。センターがちゃんとありますので、それを明記した方がより良いのかなと思いました。

【浅村計画担当係長】

その点については、我々も確かにそういう側面がありますので、これからボランティアの重要性を掲げていくためのセンターの役割というのを踏まえて、追記をする方向で検討させて頂ければと思います。

【内田委員長】

よろしいですか。それでは次に、今日新しく追加されたクローズアップのパートについて提案があったものですが、それを答申案に挿入するという形になっていますので、そのことについてのご意見を承りたいと思います。

【星野委員】

このクローズアップのところ、「私たちの夢」という風にかかれていたのですけれども、これを見たときに私が最初に思ったのが、「みんなで描いた夢」だとか「私たちの夢」でいう「私たち」とか「みんな」って誰の事かなと思ってしまったのですね。というのも、私自身とか私の周りでまちづくりに興味のある人がいるのですが、その人たちの会話の中で、そういった新幹線とかスポーツ大会の誘致とか、目的として存在しているというような話になったことが無かったんですよ。あくまでも、景気がよくなるのだったら新幹線とかいいよね、とか誘致とかもあるかもね、という話があったのですが、積極的に目指していく目的という風に出てきたことがなかったので、ここで「私たちの夢」と言われたときに、じゃあ、ここに自分たちは入っていないんだなと疎外感を受けてしまったんですよ。ただ、「私たちの夢」とわざわざ表記されたのはおそらく、その隣の、「市民と共有する」というのを押していきたいからなんだろうなと思ったのですが、例えば、この「私たちの夢」という表現を、単純に「ブランド化戦略1」という風にしてしまった方が、逆に読んでいる人としては馴染みやすいのかなと思ったので、いきなり「みんな」でとか「私たち」のという表現を使わずに、淡々に述べて頂いた方が受け入れやすいのかなと感じました。

【石川政策企画部長】

議会とも色々なやりとりがあってこれを出させて頂いたのですが、この私たちの夢1から3は、今回唐突に出したというのではなく、ご提示いただいた戦略編の本書資料2の48ページの、白マルの一番上、新幹線や道路網の、と書いていますけども、その中に、早期開業に向けた取組を進めるとともに、という記載がありました。これは、お持ち頂いている方はご頂きたいのですが、ビジョン編の分析においても、我々は10年間の計画を作っていますが、道民悲願の北海道新幹線の札幌延伸が決定したばかりという。ただし、それが実現するのは20年先であるということで、ビジョン編の中にもトピックとして、新幹線を意識したまちづくりをしていかなければダメだと、10年間ではできないけれども、その10年間の間に20年間先を見ていこうということは記載してございました。それと、次のバックアップ拠点につきましては、49ページの一番上、札幌の優位性を生かした企業の誘致、という中に、政府系のバックアップ拠点や、さらに札幌が安心だということで民間の本社機能などの誘致も進めていきますということが書いてあります。そして、一番下の冬季スポーツ大会は、51ページ、この中の一番上に、冬季スポーツ大会の誘致、ということもしっかり明言していたわけです。これらが前回の審議会でもご議論頂きましたけれども、創造戦略5、都市ブランド創造戦略の中にちりばめられていました。ところが、議会の審議の中では、大きな事柄なんだけれども、埋没しているということでした。したがって、そこをまさにクローズアップしていきたいということでして、この3つを取り上げたということと、いずれも相手があること、さらに地元の熱意を発信しなければならない項目であるということで、まずこの10年間ではそれぞれできないかもしれないけれども、市民とともに共通の夢を持ちませんか。そうすることが街全体のパワーにつながるのではないのでしょうか、というのが市民と共有する札幌の将来ということでまずワンステップ。さらにそれを実現するために官民あげてこういう活動の一つに寄り集まりませんかという概念が、官民共同で熱意の発信、ということにしました。今後、これがちりばめられているので、これに凝縮することで、将来に、市民とともに共通の夢を持って札幌を進めていこうということで、札幌2.0というタイトルで今回、まとめてはかがかということなので、唐突ではなく前回の答申案の中を強調するとういことでのベースでいかがかなと考えてみた次第でございます。

【星野委員】

そこで今、市民と共有する理念として、こういうのをどうですかというように今、おっしゃっていたのですけれども、そういった感じのことを書いていただきたいと思ひまして、いきなり、みんな、もうこれが夢なんですというのが、決まったかのように書かれていたので、こういった3つのもの。これらが、突然出てきたとは私も思っていないで、今までの議論の中で出てきたなというのは、思っていたので、ただ、それがまるで全市民一致の夢のように書かれていたのが、なんとなく違和感があったという感じがしています。

【内田会長】

市議会の方では夢といったのですか。

【石川政策企画部長】

議会では、目玉という言い方をされておりました。なので、まずやはり、10年間ではできない事柄なので、少し遠い将来に市民とともに、何かを誘致するという共通のものを、今、夢という風に表現

をしてみたんですけれども。目玉ですという、目玉の方がよろしいでしょうか。

【内田会長】

バラ色な夢なので、それで、ここは全て、実は国からの予算を取るための目玉なんです。全部。ある意味。新幹線もそうですね。バックアップ拠点というのも当然、国からもらうと、それから冬のスポーツもそうですね、オリンピックになりますから、国からの予算が入る。

いわゆるそういうことを議会が、念頭においてやっていることなんですと私は、理解しています。

それで、それ自体は、私は悪いことでは無いと思うんですね。国の予算を取ってくるということは。だけど、それがそのこと自体が、道民の本当の淡い意味での夢かというところとちょっと私は違うと思うんです。これは、市議会の方で、クローズアップしたいというのは、わかりますので、これを外す必要はないと思いますけれども。やはり夢の実現というのは、ちょっと私には違和感があります。

何か、言葉を変えて欲しいという気がします。

【五十嵐委員】

この3つというのは、夢というよりは、目標というよりは、手段。今、この戦略ビジョンの中でいえば、このことをやるために戦略ビジョンがあるわけではないので、こういったことについてどういう街ができるのかというのが、戦略ビジョンで描くべきですから、これそのものを夢と言ってしまうと、目標と手段を間違えるのかなという気がしましたので、夢と書いたのは違うなと思いました。

それから2つめはこの3つをどう扱うかなんですけれども、この3つというのは、札幌市にとっても重要かもしれませんが、むしろ北海道にとって重要なことばかりであって、実は北海道と札幌、あるいは、周辺町村、全道の町村がともにそういう手段を使いながら、北海道とか札幌、それぞれが暮らしている地域をどうするかというためのものだと思うんですよ。そうすると 51 ページに入れるのではなくて、117 ページのような、もうちょっと広域的に考えられるものとして、あるんだけど、札幌としてこれは主体的に主導権をとりながらもこういった手段をとっていきますよという書きの方が、私にはしっくりくるなど。

それともう一つは、これ見開きじゃなくて、見開きだと目立つので、A4にさせていただいて、同じサイズのページにさせていただかないと、これ取り上げたいんですかという印象を与えてしまうと。以上3点です。

【石川政策企画部長】

第3章は、道内連携プロジェクトということで、道庁さらには、道内各都市とどのように連携しますということを記載しているのが、第3章でございまして、このクローズアップのキーは、キーワードにも書いてありますけれども、この創造戦略の5というのが、シティプロモートの創造戦略ということでありまして、都市ブランドを高めるために、シティプロモートでした。シティプロモートは前回の審議会でもご議論がありましたけれども、市民である私たちが、誇りに思う、要するにC I戦略的な市民が誇りに思うこと。そして、それを実現するために、共同で情報発信をしながら誘致などを行っていくというキーワードがシティプロモート戦略の基本になってございまして、まさにこの3つの項目もそこにいれていたということと、この3つは、手段ではありますけれども、何が重要なのかというところ、やはり市民と一緒に誇りに思う将来のことを描きつつ、一緒に活動してみるということが、

重要なのではないかということで、当初ご提示させていただいたのが、この創造戦略5の終わったところあたりに入れることが妥当なのではないかという風にご提案をさせていただいたところであります。

【為定委員】

夢という表現でくくった場合、バックアップ拠点とは夢なのでしょう。これは中核都市にとってはある意味使命だと思います。これを札幌市が夢だと思っていると表現すると、他の地域の人達がこれを読んだときに、すごく違和感を覚えると思います。実現しなければならない重点目標という意味で3つあげるのは良いと思いますが、夢ではないと思います。これは明らかに誤解を招くのではないかと思います。あと、シティプロモート戦略が大事だから市民と共有しなければならないから、その中でも重点目標をクローズアップという形でその章の最後に付けるというのであれば、それは創造戦略5だけでいいのか、各創造戦略に重点があって、最後に読み終わったときに、総括をして分かりやすくするようなものを付けるのであれば、創造戦略5を取りまとめてこの3つが重点であるという1ページを付けるのは良いと思いますが、ここだけ章立てが終わったところで取りまとめて付けるというのは、バランスを欠くというか、他の創造戦略については、市民と行政が共有して、目標を持たなくて良いのか、ということになるのではないかという意味でも、ここだけに付けるのには、違和感があります。一番違和感があるのは「夢」という表現です。

【志済委員】

私も同じような意見なんですけども、ボトムアップで市民が願って来ているという、今までのまちづくりの審議した内容とも少し違った、どちらかという、市長が自らリーダーシップを取ってやることだと思います。ですから、もしこれを入れるのであれば、こうしたまちづくりビジョンと戦略を元に、市長自らがリーダーシップを発揮してやりたいことはこれだという宣言みたいな方が分かりやすいと思う。それと、もちろん陳情が必要ですし、国を動かしたり予算を取ってくるということが大前提になることばかりなんですけども、先生おっしゃったように、真ん中の一つは市民もピンと来ないし、別なところでやれば良いと思うし、やはりキャッチなのは1番と3番で、もっとキャッチにするには早期実現という曖昧な表現ですと、いつまでも、早ければ早いほど良いですよと言っていると、結局早くはならないので、例えば、20年後といっているものを10年以内とか、冬季オリンピックを言っているのであれば、何年のオリンピックを目指します、とか、キャッチをもっと具体的に、市長がコミットはできないけど、目指したいというリーダーシップが見えるっていうのが意味があるのではないのでしょうか。それをボトムアップ的に書くと、書いてあることは大きいのですが、何となく薄くしか聞こえないという思いがしました。

【石川政策企画部長】

今もご提言いただきましたので、答申案というものには今のクローズアップというものは外して、志済委員からもありましたように、今後、答申を受けた後、市長なりのリーダーシップの中で、加えるかどうかの判断をした上で、最終案に持っていくという形で進めさせていただくことでよろしいでしょうか。

【内田会長】

進め方としてはそれが一番よろしいと思いますが、可能でしょうか。実際に、庁内で答申案は答申案として受けて、それを受けた中でもう一度庁内で検討しますから、そこでこういう形で加わることもあり得るという意味だと思いますが、それは構わないと思います。

【石川政策企画部長】

あくまでも答申をいただき、それに基づき、さらに市民とのパブリックコメントなどもやりながら、同時に市長のリーダーシップによる加除修正もしながら最終案を作成していきますので、そういうステップの中で配慮させていただきたいと思います。

【内田会長】

答申案の中には入らないと言うことですね。

【石川政策企画部長】

入らないです。

【内田会長】

よろしいでしょうか。では、これはこれで決まりということになります。本日の意見をできるだけ反映させると言うことですが、皆さんは確認はできませんが、そういうことでよろしく願います。それでは簡単にあいさつをさせていただきたいと思います。

【内田会長】

・あいさつ

【内田会長】

それでは今後の予定を事務局からお願いします。

【浅村計画担当課長】

先ほどご指摘いただいた、ニート、若者の定義についてでございますけども、確認しましたところ、厚生労働省の定義とここで掲げている定義が若干違っております。ニートにつきましては、厚生労働省では15歳から34歳までの若者で、仕事についておらず、家事も通学もしていない人。若者については、厚労省の定義では、15歳から34歳となっております。札幌市におきましては、主に18～34歳という定義を若者にはしております、これは若者支援基本構想という札幌市の計画での定義であります。そういったことも含めて、出典が分かるような形で直すと言うことでご理解いただければと思います。今後の予定としましては、答申書の修正をしまして、内田会長のご確認をいただいた上で、会長、副会長によりまして、6月11日に市長に答申をいただく予定となっております。

最後に審議会委員の皆様へ、市長政策室長の渡邊から一言ごあいさつ申し上げます。

【渡邊市長政策室長】

・あいさつ

【内田会長】

これで審議会を終了させていただきます。お疲れ様でした。

以上